

「教育サービス面における社会貢献」評価報告書

(平成12年度着手 全学テーマ別評価)

岡崎国立共同研究機構

平成14年3月

大学評価・学位授与機構

大学評価・学位授与機構が行う大学評価

大学評価・学位授与機構が行う大学評価について

1 評価の目的

大学評価・学位授与機構（以下「機構」）が実施する評価は、大学及び大学共同利用機関（以下「大学等」）が競争的環境の中で個性が輝く機関として一層発展するよう、大学等の教育研究活動等の状況や成果を多面的に評価することにより、その教育研究活動等の改善に役立てるとともに、評価結果を社会に公表することにより、公共的機関としての大学等の諸活動について、広く国民の理解と支持が得られるよう支援・促進していくことを目的としている。

2 評価の区分

機構の実施する評価は、平成 14 年度中の着手までを段階的実施(試行)期間としており、今回報告する平成 12 年度着手分については、以下の 3 区分で、記載のテーマ及び分野で実施した。

全学テーマ別評価（「教育サービス面における社会貢献」）

分野別教育評価（「理学系」、「医学系（医学）」）

分野別研究評価（「理学系」、「医学系（医学）」）

3 目的及び目標に即した評価

機構の実施する評価は、大学等の個性や特色が十二分に発揮できるよう、当該大学等の設定した目的及び目標に即して行うことを基本原則としている。そのため、大学等の設置の趣旨、歴史や伝統、人的・物的条件、地理的条件、将来計画などを考慮して、明確かつ具体的な目的及び目標が設定されることを前提とした。

全学テーマ別評価「教育サービス面における社会貢献」について

1 評価の対象

本テーマでは、大学等が行っている教育面での社会貢献活動のうち、正規の課程に在籍する学生以外の者に対する教育活動及び学習機会の提供について、全機関的組織で行われている活動及び全機関的な方針の下に学部やその他の部局で行われている活動を対象とした。

対象機関は、設置者（文部科学省）から要請のあった、国立大学（政策研究大学院大学及び短期大学を除く 98 大学）及び大学共同利用機関（総合地球環境学研究所を除く 14 機関）とした。

各大学等における本テーマに関する活動の「とらえ方」、「目的及び目標」及び「具体的な取組の現状」については、「教育サービス面における社会貢献に関する目的及び目標」に掲げている。

2 評価の内容・方法

評価は、大学等の現在の活動状況について、過去 5 年間の状況の分析を通じて、次の 3 項目の項目別評価によ

り実施した。

- 1) 目的及び目標を達成するための取組
- 2) 目的及び目標の達成状況
- 3) 改善のためのシステム

3 評価のプロセス

大学等においては、機構の示す要項に基づき自己評価を行い、自己評価書（根拠となる資料・データを含む。）を機構に提出した。

機構においては、専門委員会の下に、専門委員会委員及び評価員による評価チームを編成し、自己評価書の書面調査及びヒアリングの結果を踏まえて評価を行い、その結果を専門委員会でき取りまとめた上、大学評価委員会で評価結果を決定した。

機構は、評価結果に対する意見の申立ての機会を設け、申立てがあった大学等について、大学評価委員会において最終的な評価結果を確定した。

4 本報告書の内容

「対象機関の現況」及び「教育サービス面における社会貢献に関する目的及び目標」は、当該大学等から提出された自己評価書から転載している。

「評価結果」は、評価項目ごとに、特記すべき点を「特に優れた点及び改善点等」として記述している。

また、「貢献（達成又は機能）の状況（水準）」として、以下の 4 種類の「水準を分かりやすく示す記述」を用いている。

- ・十分に貢献（達成又は機能）している。
- ・おおむね貢献（達成又は機能）しているが、改善の余地もある。
- ・ある程度貢献（達成又は機能）しているが、改善の必要がある。
- ・貢献しておらず（達成又は整備が不十分であり）、大幅な改善の必要がある。

なお、これらの水準は、当該大学等の設定した目的及び目標に対するものであり、相対比較することは意味を持たない。

また、総合的評価については、各評価項目を通じた事柄や全体を見たときに指摘できる事柄について評価を行うこととしていたが、この評価に該当する事柄が得られなかったため、総合的評価としての記述は行わないこととした。

「評価結果の概要」は、評価結果を要約して示している。

「意見の申立て及びその対応」は、評価結果に対する意見の申立てがあった大学等について、その内容とそれへの対応を示している。

5 本報告書の公表

本報告書は、大学等及びその設置者に提供するとともに、広く社会に公表している。

対象機関の現況

1. 1 機関名

岡崎国立共同研究機構

1. 2 所在地

愛知県岡崎市明大寺町字西郷中 38

1. 3 概要

岡崎国立共同研究機構（以下「機構」という。）は、昭和 50 年に設立された分子科学研究所と、昭和 52 年に設立された基礎生物学研究所及び生理学研究所から成る生物科学総合研究機構を合わせて、これらの研究所の独自性を保ちながら、運営の一体化を図るため、昭和 56 年 4 月 14 日、国立学校設置法に基づいて設立されたもので、それぞれの研究所の目的とする研究を推進するとともに、全国の国・公・私立大学等の研究者が共同で利用する文部科学省所轄の大学共同利用機関の一つである。

大学共同利用機関は、大学における学術研究の発展に資するため、共同研究の中心として、また、国際シンポジウムの開催等による国際的な研究交流の我が国の拠点として活動することを第一の使命としている。また、総合研究大学院大学や特別共同利用研究員制度などの仕組みを通じて、次世代を担う研究者養成にも貢献している。

分子科学研究所は、物質の基礎である分子及び分子集合体の構造とその機能を実験的及び理論的に究明するとともに、分子科学の研究を推進するための中核として、広く国内外の研究者の共同利用に供することを目的としている。

基礎生物学研究所は、生命の営みの基本をなす重要な現象を取り上げて、それらを遺伝子・タンパク質等分子の働きとして解明することを目指した高度の基礎研究を行うとともに、広く国内外の研究者の共同利用に供することを目的としている。

生理学研究所は、人間がよりよい健康な生活をおくれるように医学の基本である“正常な人体の機能の仕組み”を解明するとともに、生理学研究の中核として、広く国内外の研究者の共同利用に供することを目的としている。

また、機構共通研究施設として、統合バイオサイエンスセンター、計算科学研究センター、動物実験センター、アイソトープ実験センターがある。

統合バイオサイエンスセンターは、発生・分化・再生等の時系列生命現象を中心とする生命科学研究を、分子レベルからその集合組織体としての生命体へと統合する視点から行うことを目的とし、化学、物理学における最新の研究成果、研究手法を大胆に取り入れ、21 世紀の新たなバイオサイエンス研究の潮流を創り上げる施設として、平成 12 年 4 月に設置された。従来の機構の各研究所に附置されてきた研究施設とは異なり、分子科学研

究所、基礎生物学研究所、生理学研究所の 3 研究所が協力し、学問的・社会的要請を先取りした独創的研究を推進する機構全体の共通研究施設である。

また、統合バイオサイエンスセンターを機構共通研究施設として設置するに伴い、3 研究所に置かれていた研究基盤に関する共通機能を統合再編成し、機能の高水準化を図るとともに、機構全体としての効率化を図る観点から、計算科学研究センター、動物実験センター、アイソトープ実験センターを機構共通研究施設に転換した。

また、昭和 63 年 10 月 1 日、総合研究大学院大学の創設に伴い、本機構のそれぞれの研究所には同大学の専攻が置かれている。

現在、現員は 373 人で、内訳は機構長・所長のほか教官 205 人（教授 45 人、助教授 51 人、助手 109 人）、技官 97 人、事務職員等 67 人である（平成 13 年 7 月 1 日現在）。

教育サービス面における社会貢献に関する目的及び目標

1. 教育サービス面における社会貢献に関する考え方

1.1 全体について

機構における教育サービス面における社会貢献活動は、地域社会を対象に行われるもの（以下これを「類型」とする。）と、我が国全体の研究者・技術者を対象に最新技術の修得や技術交流を行うもの（以下これを「類型」とする。）とに大別される。

「対象機関の現況」にも述べたように、機構の使命は共同研究を中心とする学術研究活動と研究者養成である。これらの活動を通じて、機構は広い意味で社会貢献を果たしていると言うことができるが、より直接的な意味での社会貢献活動は、機構の本来の使命からして活動全体の中では副次的なものとして位置づけざるを得ない。

また、機構の学術研究活動は、我が国全体あるいは世界を対象として展開されるものであるため、とすれば地域社会との連携は薄いものになりがちである。また、基礎科学の研究を行う研究所としての性格から、例えば地元企業等との共同研究などによる地域社会との研究面での連携も、応用研究を行う大学の工学部などに比べれば強いとは言い難い。

しかしながら、こうした状況の中でも、機構の活動について地域社会の理解と協力を得ていくためには、社会貢献活動の中でも、類型の社会貢献活動は極めて重要な意義を持つものである。さまざまな人的・物的な制約はあるが、地域社会とのつながりを保っていくためには、これを機構の重要な活動のひとつとして位置付けていく必要があるととらえている。

類型の社会貢献活動としては、大学院生や若手研究者を対象としたトレーニングコースなどを実施しており、これも重要な活動として位置付けている。

1.2 具体的活動について

以下、機構及び各研究所の取組の具体的活動を各実施主体ごとに列記すると次のとおりである。これらの内容については、「3 教育サービス面における社会貢献に関する取組の現状」の中で述べる。なお、それぞれの取組を類型で分類しておく。

また、この他にも、地元の岡崎市をはじめとした自治体主催の市民公開講座への講師派遣、市内小学校主催の科学教室への講師派遣などへの協力を行っているが、これらは機構が主催者として実施するものではないため、本自己評価書の対象からは除いている。

(1) 機構

- ア．研究所一般公開（類型）
- イ．国研セミナー（類型）
- ウ．おかざき寺子屋教室（類型）
- エ．機構長招へい技術課合同セミナー（類型）
- オ．スーパーコンピュータワークショップ（類型）
- (2) 分子科学研究所
 - ア．分子科学フォーラム（類型）
- (3) 基礎生物学研究所
 - ア．バイオサイエンストレーニングコース（類型）
 - イ．生物学技術研究会（類型）
- (4) 生理学研究所
 - ア．生理科学実験技術トレーニングコース（類型）
 - イ．岡崎市医師会講演会（類型）
 - ウ．生理学技術研究会（類型）

2. 教育サービス面における社会貢献に関する目的及び目標

2.1 目的

まず、類型「地域社会に対する教育サービス面における社会貢献活動」について述べる。

機構がその本来の使命とする活動を展開する上で、地域との円滑な関係を築くことが不可欠であり、そのためには、まず地域住民に機構がどのような活動をしているかを理解してもらわなければならない。また、国際交流の拠点として活動する際、我が国の生活習慣を十分に承知していない外国人研究者が地域の中で生活するためにも、地域住民との間に無用のトラブルを生じないようにすることも必要である。

これらのことを念頭において、地域住民に対し、機構及び各研究所がどのような活動をしているかを理解してもらわなければならないことが、地域社会に対する教育サービス面における社会貢献活動の目的の第一である。

この目的の達成のためには、広報誌の発行等の広報活動も重要であるが、同時に社会貢献活動は広報活動と車の両輪をなすものとして位置付けられる。

機構は、昭和45年に愛知教育大学が刈谷市に移転した後、岡崎市等の関係者の熱心な誘致によりその跡地に設置された経緯があり、市内中心部に国立の研究所群があつて国際的な研究を行っていることに対する岡崎市民の関心は大変高い。このような地元住民の関心に応えることはそもそも誘致時点から機構に求められていることと言ってよく、これが地域社会に対する教育サービス面における社会貢献活動の目的の第二となる。

なお、機構独自で社会貢献活動を行うことは、事務体制上からも制約がある（現在、機構全体の中で社会貢献活動を担当しているセクションは、管理局庶務課企画調査係（係長1,非常勤職員1）となっている。）ことから、岡崎南ロータリークラブ、岡崎青年会議所などの地域の外部団体との連携協力を最大限に図ることを社会貢献活動の実施条件として考えている。

次に、類型「我が国全体を視野に入れた教育サービス面における社会貢献活動」については、総合研究大学院大学や特別共同利用研究員制度などの大学共同利用機関としての共通的な制度では対応できない、より多様な人々の必要に応じて受講可能なシステムを提供することを目的としている。この観点から、若手研究者などに短期間で最新の実験技術を修得させることを目的としたトレーニングコースや、大学等の技術者の技術向上を目的とした、技術研究会を実施している。

2.2 目標

2.2.1 全体について

類型の社会貢献活動目標の第一は、多くの地域住民に機構及び各研究所の事業活動を理解してもらうことである。人的、物的制約から、社会貢献活動の回数は限られてくるが、その限られた回数の中で、多くの地域住民との接触を図る必要がある。

また、これに伴い、連携協力を図る地域の外部団体との接触そのものが、事業活動の理解につながることもあり、地域の外部団体と密接かつスムーズに連携協力を図ることが目標の第二である。

次に、類型の社会貢献活動については、多くの若手研究者、大学院生、技術者等にトレーニングコース、技術研究会等に参加してもらうことが目標の第一である。

また、トレーニングコース、技術研究会等への参加者の要望に応えたプログラムを提供し、今後の研究活動等に生かしてもらうことが目標の第二である。

2.2.2 個々の取組について

(1) 機構

ア．研究所一般公開

研究所一般公開の目標は、多くの入場者に参加してもらい、入場者にわかりやすく研究所の研究の内容を展示発表し、理解してもらうことである。

また、一般公開の機会をとらえて、各種メディアに研究所のことを取り上げてもらうことも大切である。

イ．国研セミナー

国研セミナーの目標は、多くの小中学校教員に参加してもらい、参加した教員に、最新の研究成果を理解してもらうことである。

また、セミナーの開催に伴い、共催する岡崎南ロータリークラブとの連携を事業の実施によって強めることである。

ウ．おかざき寺子屋教室

おかざき寺子屋教室の目標の第一は、参加した小学生

に、科学実験を体験させたり、最先端の研究所の設備に触れてもらい、理科への興味を高めることである。

目標の第二は、共催する岡崎青年会議所との連携を事業の実施によって強めることである。

エ．機構長招へい技術課合同セミナー

機構長招へい技術課合同セミナーの目標は、機構の技術課職員と大学及び民間企業の技術者との技術的連携を図ることである。

オ．スーパーコンピュータワークショップ

スーパーコンピュータワークショップの目標は、計算科学研究センターに設置されているスーパーコンピュータに関する情報、利用例を提供することで、研究者・学生のスーパーコンピュータ及び本センターに対する興味を高めることである。

(2) 分子科学研究所

ア．分子科学フォーラム

分子科学フォーラムの目標の第一は、参加した一般市民に分子科学とその関連分野に関する第一線の研究成果を平易に紹介することで分子科学及び分子科学研究所への理解と親近感を向上させることである。

目標の第二は、共催する財団法人豊田理化学研究所との連携を事業の実施によって強めることである。

(3) 基礎生物学研究所

ア．バイオサイエンストレーニングコース

バイオサイエンストレーニングコースの目標の第一は、全国の基礎生物学に携わる若手研究者に最新の研究技術を修得してもらうことである。

目標の第二は、参加した若手研究者に基礎生物学研究所がどのような活動をしているか理解してもらい、共同研究等への関心を高めることである。

イ．生物学技術研究会

生物学技術研究会の目標の第一は、技術系職員の資質と技術レベルの向上であり、目標の第二は大学等の技術系職員の交流とネットワーク化を図ることである。

(4) 生理学研究所

ア．生理科学実験技術トレーニングコース

生理科学実験技術トレーニングコースの目標は、全国の大学の学部及び大学院の学生と公的及び民間の研究機関の若手研究者を対象として、生理学に関する最新の実験技術を修得させることである。

イ．岡崎市医師会講演会

岡崎市医師会講演会の目標は、岡崎市医師会員(約350名)の生涯教育の一環として、医学の基礎である生理学の最新知見を毎年1回医師会員に解説し、医療の現場に反映してもらうことである。

ウ．生理学技術研究会

生理学技術研究会の目標は、全国の大学等の技術系職員を対象に、最先端技術の相互交流や講演を行うことによって技術系職員の資質の向上と連携の強化を図ること

である。

3. 教育サービス面における社会貢献に関する取組の現状

機構及び各研究所における教育サービス面における社会貢献に関する取組の現状について、実施主体ごとに以下に記述する。

(1) 機構

ア. 研究所一般公開

毎年1回、3研究所が持ち回りで、広く市民、学生等に対して研究所を公開。

イ. 国研セミナー

岡崎南口タリークラブとの交流事業。岡崎市内の小中学校理科教員に対して最新の研究状況を講演するセミナーを年3回実施。

ウ. おかざき寺子屋教室

岡崎青年会議所との共催事業。岡崎市内の小学生を対象に講演と科学実験体験を実施。

エ. 機構長招へい技術課合同セミナー

3研究所の各技術課がそれぞれの技術領域にまたがる諸問題を技術的連携をもって解決を図る目的で実施する合同セミナー。東海地区の大学、民間企業の技術者が参加。

オ. スーパーコンピュータワークショップ

計算科学研究センターに設置されているスーパーコンピュータへの興味・関心を高めるため、大学等の研究者と学生を対象に性能・使用法・成果例などに関するスーパーコンピュータワークショップを主催。

(2) 分子科学研究所

ア. 分子科学フォーラム

分子科学の成果を一般に分かりやすく還元することを目的として、財団法人豊田理化学研究所と共催で、一般市民を対象とした分子科学フォーラムを主催。

(3) 基礎生物学研究所

ア. バイオサイエンストレーニングコース

最新の研究技術を修得させるため、大学院レベルの学生を主たる対象として、基礎生物学の各々の分野について各研究室が1週間の実験を指導するバイオサイエンストレーニングコースを実施。

イ. 生物学技術研究会

大学等の技術者の技術向上と交流を目的として、遺伝子工学、生化学分析、組織形態解析、組織培養、実験動物の飼育・管理、ラジオアイソトープの管理、情報処理・ネットワーク管理等の技術発表と最先端技術の講演とによる技術研究会を主催。なお、(4)ウの生理学技術

研究会とは、平成11年度は同時開催、平成12年度は合同開催となっている。

(4) 生理学研究所

ア. 生理科学実験技術トレーニングコース

学部及び大学院学生と若手研究者を対象として、生理科学の様々な分野における実験技術を、基礎的技術と知識の習得からその応用、さらに最先端の技術の習得を目標として、1週間にわたり指導する生理科学実験技術トレーニングコースを実施。

イ. 岡崎市医師会講演会

岡崎市医師会員の生涯教育の一環として、医学の基礎である生理学の最新知見を医師会員に解説する岡崎市医師会講演会を実施。

ウ. 生理学技術研究会

大学等の技術系職員を対象に、電気回路、機械工作、コンピュータ、遺伝子工学、生化学分析、細胞培養、顕微鏡、実験動物分野等の技術発表と講演とによる技術研究会を実施。

評価結果

1. 目的及び目標を達成するための取組

岡崎国立共同研究機構においては、「教育サービス面における社会貢献」に関する取組として、研究所一般公開、国研セミナー、おかざき寺子屋教室、機構長招へい技術課合同セミナー、スーパーコンピュータワークショップ、分子科学フォーラム、バイオサイエンストレーニングコース、生物学技術研究会、生理学実験技術トレーニングコース、岡崎医師会講演会、生理学技術研究会などが行われている。

ここでは、これらの取組を「目的及び目標を達成するための取組」として評価し、特記すべき点を「特に優れた点及び改善点等」として示し、目的及び目標の達成への貢献の程度を「貢献の状況（水準）」として示している。

特に優れた点及び改善点等

「国研セミナー」は、地域のロータリークラブとの共催事業として行われており、地域の岡崎市内小中学校教員を対象に最新の研究成果を提供すると同時に、その内容が間接的に児童生徒にも伝わることから波及効果もある。本取組は、地域の外部団体と連携・協力し、地域住民の期待に応える取組として特色があり優れている。

「おかざき寺子屋教室」は、岡崎市内の小学生を対象に地域の青年会議所との共催事業として行われており、講演と科学実験体験を行うことで、科学に対する興味・関心を喚起している。本取組は、地域の外部団体と連携・協力し、地域住民の期待に応える取組として特色があり優れている。ただし、実施回数は年1回であり、科学実験を実際に体験させる取組であることやリソースの問題から受入人数や実施回数に制約があることは否めないが、運営面等について改善の余地もある。

「分子科学フォーラム」では、一般市民に対し分子科学の研究活動を紹介している。第一線の研究者に直接接する機会である点で参加者の期待は大きく、地域住民に対する当機構への理解を促進するとともに地域住民の期待に応える取組として優れている。

「岡崎市医師会講演会」は、医師会との連携で岡崎市の医師を対象に実施され、生物学の最先端研究を開業医の医療技術に結合するという点で特色があり、地域の期待に応えるための取組として優れている。

「スーパーコンピュータワークショップ」、「バイオサイエンストレーニングコース」、「生理学実験技術トレーニングコース」などは、大学の研究者や学生、国の機関・企業等の若手研究者・技術者等を対象として、大学共同利用機関としての共通的な制度では対応できない、より多様な人々のニーズに対応した受講システムが提供されており、若手研究者・技術者等の技術向上に向けた取組として優れている。中でも「スーパーコンピュータワークショップ」は、外部者の利用ニーズが高いスーパーコンピュータをその性能、使用法、成果例などを含めて提供している点で社会的意義が認められ、機構のリソースを有効に活用した取組として優れている。

研究所の一般公開は、日常地域住民が自由に立ち入ることのできない研究所の内部を公開することから入場者の関心が高く、展示テーマに工夫がなされているほか、市内主要箇所へのポスターの掲示、新聞各紙への記事掲載、コミュニティFMを通じての告知など積極的な広報活動が行われており、研究所及び研究内容の理解の促進に向けた取組として優れている。

貢献の状況（水準）

取組は目的及び目標の達成に十分に貢献している。

2. 目的及び目標の達成状況

ここでは、「1. 目的及び目標を達成するための取組」の冒頭に掲げた取組の達成状況を評価し、特記すべき点を「特に優れた点及び改善点等」として示し、目的及び目標の達成状況の程度を「達成の状況（水準）」として示している。

特に優れた点及び改善点等

研究所の一般公開については、専門性が高いテーマにもかかわらず、参加者は毎年度 1,000 ～ 2,000 人程度、その層は小学生から主婦まで幅広く、成果を得ている。また、参加者の 3 ～ 4 割程度がリピーターであり、アンケート調査で「おもしろかった」、「勉強になった」、「興味がわいた」などの感想を得ていることから満足度も高く成果を得ている。

「バイオサイエンストレーニングコース」については、毎年定員を大幅に上回る応募者を得ている。また、近年の参加者に対するアンケート調査では、その 75% が期待通り、または期待以上と回答していることから満足度が高く成果を得ている。

「生理科学実験技術トレーニングコース」については、平成12年度の実績をみると募集人員約130人に対し、応募者数196人、受講者数137人を得ている。また、参加者に対するアンケート調査で、そのほとんどが講演・実習内容に満足したと回答していることから成果を得ている。

達成の状況（水準）

目的及び目標が十分達成されている。

3. 改善のためのシステム

ここでは、当該機構の「教育サービス面における社会貢献」に関する改善に向けた取組を、「改善のためのシステム」として評価し、特記すべき点を「特に優れた点及び改善点等」として示し、システムの機能の程度を「機能の状況（水準）」として示している。

特に優れた点及び改善点等

研究所の一般公開をはじめ各種のセミナー、研究会では、参加者に対するアンケート調査を実施し、サービス享受者の意見等を把握するシステムが整備されている点は優れている。しかし、実施・評価・改善は、基本的に各研究所単位で行われており、機構全体としての連絡・調整等は岡崎研究所長会議が担っているものの十分ではなく、把握された意見等を機構内でシステム化し具体的な改善に結びつける体制が十分ではない。各種の取組が各研究所の自発性に負うところが大きいことは否めないが、機構全体として連絡・調整等を行い、改善に結びつけるためのシステムについて改善の余地もある。

機能の状況（水準）

改善のためのシステムがおおむね機能しているが、改善の余地もある。

評価結果の概要

1. 目的及び目標を達成するための取組

特に優れた点及び改善点等

「国研セミナー」は、地域の外部団体と連携・協力し、地域住民の期待に応える取組として特色があり優れている。

「おかざき寺子屋教室」は、地域の外部団体と連携・協力し、地域住民の期待に応える取組として特色があり優れている。ただし、運営面等について改善の余地もある。

「分子科学フォーラム」は、地域住民に対する当機構への理解を促進するとともに地域住民の期待に応える取組として優れている。

「岡崎市医師会講演会」は、医師会との連携により地域の期待に応える特色ある取組である。

「スーパーコンピュータワークショップ」、「バイオサイエンストレーニングコース」、「生理科学実験技術トレーニングコース」等は、若手研究者・技術者の技術向上に向けた取組として優れている。中でも「スーパーコンピュータワークショップ」は、リソースを有効に活用した取組として優れている。

研究所の一般公開は、展示テーマに関する工夫や積極的な広報活動が行われており、研究所の理解の促進に向けた取組として優れている。

貢献の状況（水準）

取組は目的及び目標の達成に十分に貢献している。

2. 目的及び目標の達成状況

特に優れた点及び改善点等

研究所の一般公開は、毎年度 1,000 ～ 2,000 人程度の参加者を受け入れており、その参加者層は幅広い。また、参加者の 3 ～ 4 割程度がリピーターであり、アンケート結果から満足度も高く成果を得ている。

「バイオサイエンストレーニングコース」は、定員を上回る応募者を得ており、アンケート結果から満足度が高く成果を得ている。

「生理科学実験技術トレーニングコース」は、定員を上回る応募者を得ており、アンケート結果から満足度が高く成果を得ている。

達成の状況（水準）

目的及び目標が十分達成されている。

3. 改善のためのシステム

特に優れた点及び改善点等

各種の取組が各研究所の自発性に負うところが大きいことは否めないが、機構全体として連絡・調整等を行い、改善に結びつけるためのシステムについて改善の余地もある。

機能の状況（水準）

改善のためのシステムがおおむね機能しているが、改善の余地もある。